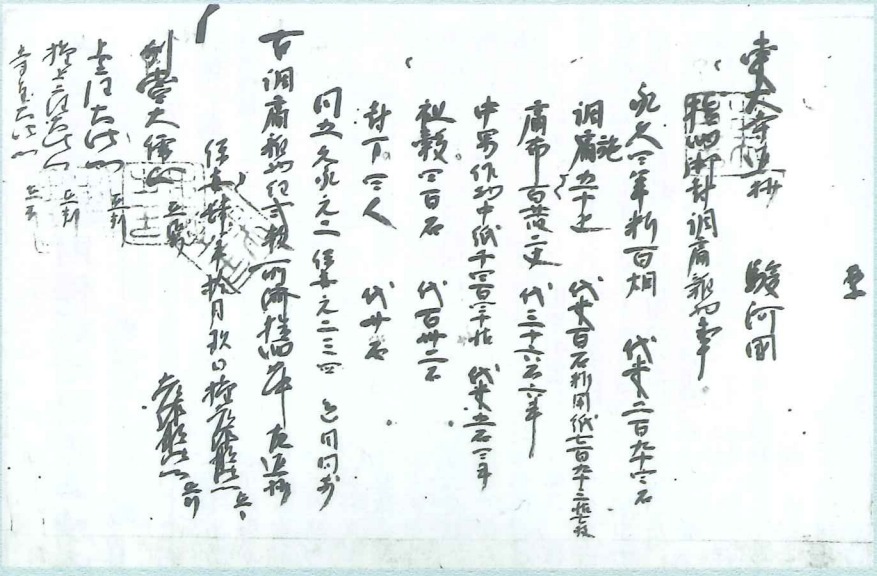
藤枝市史だより

第9号

平成15年10月10日発行
編集・発行 藤枝市郷土博物館
市史編さん係
〒426－0014
藤枝市若王子500（蓮華寺池公園内）
TEL 054（645）1100
E-mail
fujieda-muse@ny.tokai.or.jp

平安時代の領収書

―保安四年（一一二三）一〇月九日付 東大寺返抄案―



保安４年（1123）10月９日付東大寺返抄案
（正倉院宝物：『東南院文書』２櫃２巻、『藤枝市史』資料編２　資料番号88）

現在、私達が、商品を返品したり、交換したりするために店を訪れると、「領収書をお持ちですか？」と言われます。もし領収書をなくしていれば、私達は、「領収書がない商品の交換や返金は出来ません」という店員の言葉に従うしかありません。逆に、店で領収書の控えを保管していなければ、店員は、領収書を持って来たお客の要求通り、商品の交換や返金を行うしかありません。

このように、現代社会においては、代金や商品を受け取った側と渡した側に問題が生じた場合、「領収書」や「控え」を持っている方の主張が認められるようになっています。こうした仕組みが日本で取り入れられたのは、今から約一三〇〇年前のことです。現在、奈良の東大寺には、その当時の領収書や控えがたくさん残されています。その中の一つが、上に掲げた「東大寺返抄案」です。これは、東大寺が文書や物品を受領したことを証明する文書の控えなのです。

その記載内容から、①保安四年（一一二三）一〇月頃に、駿河国から「御封調庸雑物」と称される税物が東大寺に納入されたこと、②東大寺の政所（運営組織）は、受け取った税物の内訳（「絁五〇疋」「布一二一段二丈」など）と総額（「代米二九四石」）を書き上げて、駿河国衙（駿河国の役所）に「返抄」という領収書の正文（差出人から受取人に出された正式な文書）を送ると共に、「返抄案」という領収書の案文（手控えとして正文を書き写した文書）を作成し、保管していたことがわかります。

東大寺は、どうして返抄を駿河国衙に送ると共に、返抄案という写しを保管しておく必要があったのでしょうか？

古代の東大寺は、駿河国益頭郡（現在の静岡県藤枝市・焼津市・志太郡岡部町）などに設定された封戸（上級の貴族や寺社に俸禄として与えられた世帯）から徴収された調・庸などの税物を財源として運営されていました。封戸からの税物の取り立ては、東大寺などの封主（封戸の持ち主）が直接現地に赴いて行う場合と、駿河国衙などの役人がそれを代行して納税責任を果たす場合とがありましたが、次第に後者の方が一般的になっていきました。

当初は、規定量の税物を全額で一括納入した場合だけに返抄を与えていましたが、次第に納入が滞るようになってくると、東大寺は、少しでも税物を確保するために規定量以下の納入であっても分割納入を認めて、「仮納返抄」と呼ばれる返抄を与え、納入が完済した時点で改めて、「惣返抄」と呼ばれる返抄を渡すようになっていきました。

この頃には、実際には分割納入として処理されたにも関わらず、翌年になると、納税者側が徴税者側に対して「税物は全額納入したはずなので追加納入はしない」と訴えたり、徴税者側が納税者側に対して「税物は一切受け取っていないので全額納入しろ」と訴えたりする事件が、頻発していました。このような不当な訴えを斥けるためには、分割納入として処理されたことを示す領収書を見せて、自分の正当性を主張するしかありませんでした。そこで、駿河国衙側（納税者）は「返抄」を、東大寺側（徴税者）は「返抄案」を、それぞれ大切に保管し、起こるかもしれないトラブルに備えていたのです。

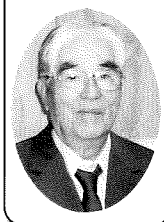
上掲の「東大寺返抄案」は、納税をめぐる東大寺の僧侶と駿河国の人々との緊張関係を示しているだけではなく、私達がなにげなく使っている領収書や控えにも歴史的な経緯や意味が隠されていることを教えてくれます。

（古代担当調査補助員　岩宮隆司〈奈良県立民俗博物館〉）

藤枝の文化財保護活動のあゆみ

その一――戦後の文化運動――

藤枝市文化財保護審議会委員
前藤枝市史編さん委員
天野　信直



昭和二十年（一九四五）八月六日午前八時十五分広島、九日午前十一時二分長崎に二発目の原子爆弾が投下され、八月十五日に連合国の発したポツダム宣言を受託して日本は無条件降伏をした。国の全てが連合国最高司令官総司令部（GHQ）の指揮下におかれた。戦中の地域の自治体組織は隣組に至るまで解体させられた。

愛国の名が付いた諸団体も解体し、幹部は公職から追放された。中でも昭和二十二年（一九四七）から二十五年（一九五〇）にかけて三年間で日本の農村の地主、小作制度は崩壊し、旧来の農村の仕組み、秩序、習慣が根本から改革された。農業経営が大部分を占める藤枝も同様に改革の新風が吹き荒れた。地域自治体の解散で町村民は一時は情報の空白状態が続いた。街角に立つ辻札の如き「弘報板」（写真）が住民の唯一の情報機関であった。最後まで残った一つは、八木祥夫氏によって保護され、今は藤枝市郷土博物館に所蔵されている。

藤枝町役場弘報板（藤枝市郷土博物館蔵）

新生藤枝の文化の曙はこの荒れ果てた時を境にはやくも微かに光がさし始めた。終戦直後の藤枝の現況を書き残そうと有志が集まった。歴史的に価値のあるものが、進駐軍に持ち去られるのではないかと危惧したのである。

田畑から見出される土器は拾得物であって、警察に届ければやがて拾い主のものになった。市内の遺跡から拾得して本人の所有になっているものは、その時代のものである。

葉梨の岡村六治をはじめ福井金苗、彦坂博達は郷土の歴史の保存に、衣原の遺跡、花倉を中心に遍照光寺、長慶寺の今川関係の保存に駆けずり廻った。

市街地区では、ろくに食べ物のない殺伐とした藤枝に新風を吹き込もうとした者達がいた。昭和二十一年（一九四六）五月、小川博、服部恭治、小野田保蔵、天野保雄、神尾承真は藤枝町正定寺に仮教室を設け、藤枝女子学園を設立した。藤枝町、青島町、岡部町、伊久美村から一二〇名の入学者を迎えて開園した。

GHQが最も注視していた、彼らの言う日本の女性の人権を守り、男女平等は、占領軍の民生教育のスローガンの一つであった。

この学園も昭和二十八年（一九五三）に学校法人化の話があったが、小川の経済的負担があまりに大きく、数々の思い出を残して閉校するに至った。

藤枝市の組織的な文化運動は昭和二十年一月に始まる。文芸、思想評論を柱とした文学同人である小野田保蔵、繁村撤、内田庄作、村野某等による志太文化協会設立である。

昭和二十年五月にGHQの審査が通り藤枝文化会が小川博、服部恭治、小山留次、小川叔子、天野保雄、杉本宗一達を役員、世話人として、美術、書道、文芸、芸能、社会部が広い分野から住民の参加を軸に発足した。

この中の社会部が「歴史研究会」を活動の中に取り入れ、昭和二十四年（一九四九）に野放し状態の文化財保護の必要性を市民に訴えた。当初の藤枝文化会報は、市内の文化活動の記録が残されている貴重なものである。

（藤枝市史だより第10号につづく）

瓦　かわらばん　版

◆市史編さん委員の交替

編さん副委員長　新　大石　博正（助役）
　　旧　渡邉　登
編さん委員　新　富岡　清志（市自治会連合会代表）
　　旧　成島　清
編さん委員　新　藤田　芳美（市男女共同参画センター運営委員）
　　旧　谷澤　祥子（ふじえだ女性史研究会代表）

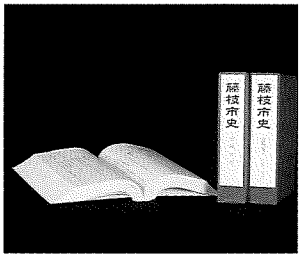
◆『藤枝市史』資料編2　古代・中世

〝先人たちの足跡をたどる珠玉の一冊〟

～駿河国志太・益頭郡の古代や戦国時代の今川・武田・徳川の激しい攻防戦が手に取るように早わかり～

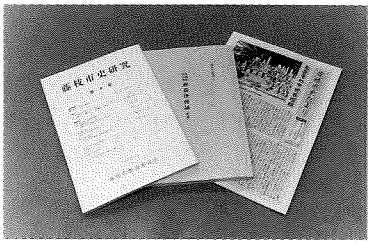
●**判型・ページ**／A5判、本文九二七頁、口絵カラー一六頁
●**価格**／三、五〇〇円（税込／送料・一冊五二〇円）
●**購入方法**／直接郷土博物館受付にて購入。または、送料を加算した普通為替を郷土博物館へ送付して下さい。

★『藤枝市史』別編・民俗（四、〇〇〇円）も好評販売中★



◆続々刊行!!

～ぜーんぶ郷土博物館で販売・配布中～



●『藤枝市史だより』第8号…A4版、六頁、無料配布
～市民の皆様から寄せられた記事（旭光座の思い出話・瀬古の雨乞い行事）も紹介～

●『西益津村誌（復刻版）』…B5版、本文一五一頁、一部一、〇〇〇円
～大正二年に作成された手書きの『西益津村誌』を活字化～

●『藤枝市史研究』第4号…B5版、本文一六九頁、一部一、〇〇〇円
～鬼岩寺の中世石塔群・安楽寺の鰐口・旧町村役場資料についての報告～

私達が執筆しています

～考古担当委員の紹介～

篠原専門委員をはじめ、計九名で資料の調査・執筆を行っています。

専門委員
篠原　和大
静岡大学人文学部助教授

前回の市史刊行から三十年余を経て、藤枝市の様子は大きく変わり、その間の発掘調査の結果多くの遺跡の資料と記録が残されました。資料編では、市内の重要遺跡を各時代毎に図や写真を用いながら詳細に解説します。遺跡相互の関係や各地の資料との比較が容易になったとき、藤枝の考古資料が再び藤枝の歴史を語り始めるでしょう。

調査委員
柴垣　勇夫
静岡大学生涯学習教育研究センター教授

志太平野を望む丘陵には、古代から中世初期の古窯跡が数多く存在します。東海地方の古代・中世窯業史を研究している関係から、古窯跡を担当しています。試掘調査をした助宗古窯跡では、郡衙などの役所と深い関係を持って須恵器を生産していますが、集落遺跡にも多く供給されています。そんな背景を考えてみたいと思っています。

調査委員
菊池　吉修
静岡県埋蔵文化財調査研究所調査研究員

私は（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所に勤めています。古墳時代、中でも後期古墳に興味をもち、研究を行っています。藤枝市はこの時期の古墳が数多く、遺構・遺物共に注目できる資料がそろっている地域です。豊富な資料から、古墳時代の藤枝市の様子を復原したいと考えています。

調査委員
八木　勝行
藤枝市郷土博物館長

本当の旧石器時代はいつから？縄文時代は米作りで豊かな時代？邪馬台国はどこに？弥生時代に古墳が？大王墓は天皇陵古墳か？大化の改新は噴水の庭園で？青丹よし奈良の都は？・・・今、考古学の世界は大きく様変わりしようとしています。藤枝という土地に刻まれた郷土の歴史を足元から見直します。

調査委員
鈴木　隆夫
藤枝市葉梨公民館長

昭和四十一年、瀬戸古墳群の発掘調査に参加して以来、数多くの市内の弥生・古墳時代などの遺跡調査を手掛けてきました。県内有数の遺跡の宝庫である藤枝の古代が再び多くの人々の目に触れる機会ができたことは調査者として大変うれしく思います。発掘当時を思い出しながら遺跡の紹介をしたいと思います。

調査委員
磯部　武男
藤枝市郷土博物館主幹兼市史編さん係長

藤枝市域に最初に居住したのは誰か？現在の青島小学校辺りにあった天ヶ谷遺跡から出土した遺物の中に、凡そ一万三千年前の石器が数点含まれていました。もちろん氏名は不明ですが、この石器を使った人物が藤枝市民第一号であったようです。資料編では、市史の中でも最も古い旧石器時代や縄文時代を担当します。石器時代のことをパソコンで入力するのは不思議な気がします。

調査委員
椿原　靖弘
藤枝市郷土博物館学芸員

この頃のお城の研究は進歩していて、出土した土器の破片数を数えて、城内の色々な場所や他の城と比較したりします。その違いから施設の使われ方や城の特徴を考えていきます。藤枝には田中城や藤枝宿に近い鬼岩寺の中世墳墓など注目される遺跡もあるので、文献資料には表れない歴史を紹介できればいいなぁ…、と考えています。

調査委員
岩木　智絵
藤枝市郷土博物館学芸員

市史考古編の古代を担当します。奈良・平安時代の遺跡は、全国的に有名な国史跡「志太郡衙跡」をはじめ、益頭郡衙跡とされる郡遺跡など重要な遺跡が数多く所在しています。近年調査が行われてその内容が注目されている水守遺跡など、発掘調査による最新の成果も併せて資料の紹介をしていきます。

また、夏休みを中心に静岡大学の大学院生、学部生の皆さんに調査を協力していただいております。

募集します

■藤枝市史のための手記

近現代史では、文書資料と共にナマの証言も大変重要です。
〝あなたの体験・証言をドシドシお寄せ下さい！〟

例えばこんなテーマ!!

戦時下
① ・満州事変のニュースをどう受け止めたか。
・日米開戦の報に接し、どのように感じたか。
・「玉音放送」をどこで聞き、どう思ったか。
② 従軍体験
③ 満蒙開拓移民体験
④ ・在郷軍人会の活動
・青年団活動
・愛国婦人会、国防婦人会、大日本婦人会等の活動について
⑤ 戦前の文芸運動や同人誌活動の経験
⑥ 戦時下の生活→衣食住、仕事、学校生活の中で嬉しかったこと、悲しかったこと、困ったこと等

戦後
⑦ 敗戦直後の日々
⑧ アメリカ占領軍と藤枝
⑨ 農地改革に関わって
⑩ 新憲法、極東軍事裁判の進行について感じたこと
⑪ 労働運動の体験やレッドパージ
⑫ 学校生活
⑬ 朝鮮戦争の頃の日々
⑭ 町村合併、藤枝市の誕生、藤枝市への編入
⑮ 藤枝の都市計画・地域開発事業（新国道建設・バイパス建設等）
⑯ 高度成長期の職場や生活の様子
⑰ 公害に直面して

その他
⑱ 藤枝の産業（茶業の移り変わり・みかん栽培・しいたけ産業）
⑲ 災害（風水害・大火・流行病等）の記憶
⑳ スポーツ（サッカー・弓道等）、藤枝の文化・娯楽など

※原稿には・・・
氏名・生年月日・住所・電話番号・転入年等を明記して下さい。
※原稿はお返し出来ません。ご了承ください。
※上記以外のテーマも大歓迎です。

＊販売・手記投稿等についての問合先＊
藤枝市郷土博物館　市史編さん係
〒426－0014　藤枝市若王子500
（TEL 054－645－1100）

平成14年度の調査から

考古

鬼岩寺中世石塔群（藤枝３丁目）

市史編さん事業の開始以降、これまでに九景寺古墳・荘館山古墳・助宗古窯・鬼岩寺中世墓地などの調査を行ってきました。平成十四年度は、これらの調査によって発見された資料の整理や図面作成を中心に活動しました。とりわけ、鬼岩寺の資料については、中世石塔群の調査と併せて『藤枝市史研究』第４号・『藤枝市史だより』第８号に掲載し、紹介しています。鬼岩寺の中世墓地のごく一部を明らかにしたにすぎませんが、中世藤枝の墓制を考える上で貴重な資料を提供することが出来ました。

また、前年度に引き続き、既存の資料についても再調査を行い、随時実測図を作成しています。

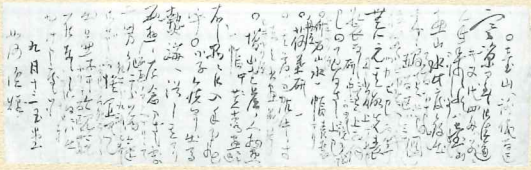
古代・中世

今川義元書状（藤枝市郷土博物館所蔵）

『藤枝市史』資料編２　古代・中世を刊行しました。今回の資料編は、藤枝市に関連する古代・中世資料を網羅することに努め、古代文献資料九六点、木簡六二点、墨書土器二八七点、歌謡など九点、中世資料八一二点を収録しています。その中には市史編さんの調査を進める中で新に発見され、今回初めて発表される資料もあります。また、すでに活字化されている資料についても可能な限り再調査を行い、改定を加えたものも沢山あります。一般の方に親しみやすいように、資料毎に頭注や解説文を付けるよう力を注ぎました。

なお、資料編の刊行にいたるまでには、資料所蔵者をはじめとする多くの皆様から調査への快いご協力をいただきました。ありがとうございました。

近世



年未詳９月13日　大塚荷渓宛浦上玉堂書簡（大慶寺所蔵）

藤枝四丁目の大慶寺には、白子町大塚家（奥州屋・酒造業）の墓所があり、関係ある資料が多数所蔵されています。大塚家は藤枝宿の素封家、田中藩の御用達であるだけでなく、文化的関心の強い家柄で、代々文人を輩出しています。天明八年（一七八八）六月には、蘭学者で洋画家の司馬江漢も長崎への途上数日間宿泊し、当時の大塚家と親交を深めています。また、文化～天保期（十九世紀前半・十一代家斉時代）の当主は大塚荷渓で、文人画や漢詩を得意とし、藤枝宿の漢詩人石野雲嶺や島田宿の漢詩人で書家の桑原苾堂といった地域の文人達と結社を作り、さらに江戸の漢詩人や画家などと広く交際し、藤枝宿の文化の最盛期を築きました。

大慶寺には画家の浦上玉堂や漢詩人の菊池五山、市川米庵などの書状、また、文化年間から天保期にかけての荷渓の日記などが所蔵されています。本年度はその撮影や解読を進めました。これらの資料により藤枝宿の文化の諸相が一段と明らかになることと思われます。

近現代

藤枝市史学習会の一コマ

市役所保管の行政文書、大井川農協関係資料、平島池田家文書を中心に資料調査を行うと同時に、資料編の刊行に向けて掲載資料の選定作業に入りました。資料調査の際には、ふじえだ女性史研究会のボランティア協力によって「志太ニュース」をはじめとする地方新聞の記事抽出作業を行っています。

こうした資料調査の一方、夏休みを利用して満蒙開拓団に参加された方々への聞き取り調査を実施し、開拓団や青少年義勇軍に関する多くの貴重な体験談を得ることが出来ました。その体験談をもとに志太郡衙資料館において『満蒙開拓団』の話をしよう」と題して平成十五年二月二十三日に学習会を開催しました。